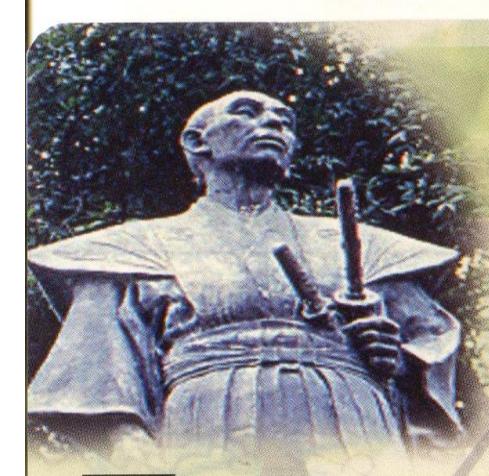


# 横井小楠

## —その業績と生涯—



勝海舟は「横井小楠の事は、尾張の或る人から聞いていたが、長崎ではじめて会った時から、途方もない聰明な人だと敬服した」「あれば米国から帰った時に、彼(小楠)が米国の事情を聞くから色々教えてやつたら、一を聞いて十を知るという風で、忽ち彼の國(米国)の事情に精通してしまった」と言っています(『氷川清話』)。また、海舟日記や手紙では、小楠に対して常に「先生」の敬称を用いています。

### 17 勝海舟との交流

小楠と海舟の最初の出会いの時期ははっきりしません。ただ、前記『氷川清話』に横井小楠のことは「長崎ではじめて会った時から」とあり、これが事実であれば、海舟の長崎伝習時代(1855~1859年)となります。しかし、確証はありません。なお、この期間に海舟は航海訓練を行い、1857・58年の2回、現天草郡大原町(当時は天領)に来航して富岡の鎮道寺に止宿※しています。

さて、小楠と海舟が江戸でお互いに往来したことについては、小楠の手紙などから窺い知ることができます。その時期は、越前招聘中の文久元年(1861)4月からの江戸滞在期間ですが、2人の交際が一層頻繁になり、親密になったのは、同2年7月に松平春嶽が政事総裁職に就任し、小楠はその顧問として幕政に関わっていたころです。当時、海舟は、軍艦奉行並※で、幕閣の意見の不統一を嘆きながらも、諸藩の人材を登用し、海軍の強化に努めることができたことだと強調していました。この意見に賛同したのは、外国との交わりは対等でなければならず、外国の圧力に屈してはならないと主張する小楠ら少数の人たちでした。海舟との対話の中でも小楠は、「最近、開鎖(開国と鎖国)の論が盛んだが、今急務とすべきことは国を興す(国力を強くする)ことである。そのためには諸侯が一致して海軍を盛大にしなければならない。しかしながら、このことに着眼する者がいないことは嘆かわしいことだ。」と言っています。

元治元年(1864)2月、海舟は、幕命により連合艦隊の下関攻撃※を



▲勝海舟(椅子)肖像写真  
(福井市立歴史博物館蔵)

延期させるために長崎にやってきました。その途中、従えて来た坂本龍馬を沼山津の四時軒に遣わしています。その前年に肥後藩から士席剥奪され謹慎していた小楠に、時事問題を伝え、金品を贈るためです。この折、小楠は甥の左平太・大平などを神戸の海軍操練所※に入所できるよう龍馬を通して海舟に依頼しました。長崎からの帰途の4月、海舟は再び龍馬を四時軒に遣り、先に小楠から依頼があった2人の甥と藩士1人を預かり、神戸へ連れて帰ります。同年5月、海舟は軍艦奉行(役高2千石)に任命され、海軍操練所が開所されます。入所については募集の布告も出されていますが、左平太なども含め諸藩からの入学生が多くなったようです。しかし、同年11月になると海舟は御役御免となり、海軍操練所も閉鎖されました。なお、左平太と大平は長崎に移って語学を学び、慶応2年(1866)4月、渡米することになります。

※鎮道寺に止宿…本堂の柱に「日本海軍指揮官 勝 麟太郎」「蒸気の御船にのりて再び爰に旅宿せしかば、たのまれぬ世をば経れどもちぎりあればふたゝび爰に月を見るかな 勝 義邦(海舟)」の落書きがある。

※軍艦奉行並…幕府の役職名で、軍艦奉行と同等職。役高は千石。  
※連合艦隊の下関攻撃…長州藩の外国船砲撃事件(1863年5月)の報復として、イギリス・アメリカ・フランス・オランダの四国連合艦隊による下関攻撃。海舟の努力も空しく1864年8月に攻撃が行われた。

※海軍操練所…幕府が軍艦操縦を教えるため神戸に設けた機関。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。